

「今日、あなたがたのために」

主任司祭 晴佐久昌英

西暦2005年が、終わる。一人ひとりにとって、どのような一年だったのだろうか。

愛する家族を亡くした人がいる。新しい家族が生まれた人もいる。初めて教会を訪れた人がいる。洗礼を受けた人もいる。つらい闇を味わった人がいる。つらい闇に光が差した人もいる。

それぞれの人にそれぞれの思いがあるだろうが、救い主の降誕祭にあたり、はっきりと宣言したい。

「あなたが神からいただいた一年、西暦2005年は、恵みの年であった」

自分のことと言えば、とにかく慌ただしい一年だった。あちこちに引っ張り出されることが増えた。例年より全国区だった気がする。札幌、静岡、大阪、舞鶴、広島、鹿児島……。来年はパリで講話を、という話も出てきた。立教大学で教えることにもなった。ラジオで話すことにもなった。カトリック新聞の連載も始まった。本も来年中に三冊出版しなければならない。

なぜ、この神父が引っ張り出されるのか。それは、みんな「福音について」ではなく「福音を」聞きたいからだ。「説明」ではなく、「宣言」を聞きたいからだ。人は人を救えない。人を救うのは神の宣言なのである。

どこに行っても、取り立てて珍しい話をするわけではない。ごく当たり前の、「ザ・カトリック」の話である。神はあなたを愛していること。イエスは共にいること。聖霊はいつでもどこでもどんな場合でも働いて、すべての人を救うこと。それらが、キリストとひとつになる洗礼、聖体の秘蹟のうちに限りなく美しく実現していること。

耳新しい話ではないはずだ。子どものころ日曜学校で習った話である。問題はそれを、「今、ここで、目の前のあなたに、喜びの知らせとして」宣言しているか、ということだろう。自分が救われた喜びの福音を、キリストとひとつになり、キリストの口となって宣言しているのか、ということだろう。

札幌では信者から「イエスさまが話しているよう」と言われ、鹿児島では司祭から「現代の預言者」と言われた。ぼくはそれを、当然のことだと受け止める。キリスト者とはイエスが話すように話す人のことであるし、司祭とは現代の預言者のことなのだから。

降誕祭の夜、天使は宣言する。「今日、あなたがたのために救い主がお生まれになった」

神の宣言である。誰ひとりこれを否定できないし、どんな悪しき力もこれを消し去ることはできない。そして、「今日」とは今生きているこの今日のことだし、「あなたがた」とは今聞いているあなたのことなのである。

神のことばを語る現代人預言者として、天使のように宣言したい。

「あなたが神からいただく新しい年、西暦2006年は、恵みの年である」